

16. HBs 抗原キャリアー T 細胞由来の HBs 抗原特異的抑制性 T 細胞因子の解析

中西 敏己・山内 克己・小松 達司・長谷川 潔・
古川 隆二・小幡 裕 (消化器内科)

17. Toxic shock syndrome toxin-1 (TSST-1) によるマウス脾臓細胞からの

マクロファージ活性化因子の産生

鎌形 有祐・内山 竹彦・吉岡 守正 (微生物)

1. Light scattering による髄液細胞の検討

(神経内科) 太田 宏平・小林 逸郎・
竹宮 敏子・丸山 勝一

目的: Laser 散乱光を利用した light scattergram (flowcytogram) は分離された個々の細胞をある細胞集団としてとらえる事が可能である。我々は flowcytometry (FCM) で髄液細胞の flowcytogram の有用性を検討した。方法: Becton Dickinson 社製 FACS 440 を用いて、対象である炎症性神経疾患の CSF を FCM で処理し flowcytogram を得た。結果: 炎症性神経疾患の CSF flowcytogram では髄液細胞を赤血球, リンパ球, 多核白血球等, その細胞形態によりいくつかの亜集団に分離する事ができた。これらの視覚的理解は容易であり, その pattern は炎症性神経疾患の診断, 経時的变化, 異常細胞の認識等に有用であった。

2. アレルギー性結膜炎 (スギ花粉症) における

IgG₄ について

(第2病院・眼科)

金山 貴子・佐藤ひとみ・宮永 嘉隆

我々は, スギ花粉アレルギー結膜炎患者を対象として, 血清中及び涙液中の免疫グロブリン (IgE, IgG₁, IgG₄) の推移を, シーズン中とシーズン外について検討した。

いずれも酵素免疫測定法により測定を行ない IgG₁, IgG₄ においてはモノクローナル抗体を使用した。

結果: IgE, IgG₁ はシーズン中はシーズン外に比較して低値を示し, シーズン中に消費されるのではないかと示唆された。一方, IgG₄ については, むしろ逆のパターンを示すことがわかり, 大変興味ある結果であった。残念ながら, 涙液中の IgG₁, IgG₄ は, 測定できなかった。

3. リンパ濾胞胚中心内補体・補体レセプターの局在について

(第2病理) 山田 幸雄・嶋田 誠・
笠島 武・梶田 昭

リンパ節リンパ濾胞胚中心は免疫応答の重要な場と考えられている。この応答に重要な役割を果たすリンパ濾胞内樹枝状細胞 (FDC) はその細胞表面に補体レセプターを有するとされ, この免疫応答に補体が関

与するとみられる。今回胚中心における補体・補体レセプターの局在を光顕および電顕レベルにて免疫組織学的に検索し, 併せて免疫グロブリンの局在をも調べた。胚中心では補体活性化古典的経路早期成分が網状に分布し, S 蛋白質も同様な分布を示した。補体レセプターは CR1, CR2 が網状分布を示した。補体と補体レセプターは FDC 表面に特異的にみられる DRC-1 の分布と一致した。また IgM・IgG も同様な網状分布を示すと共に, リンパ球胞体内 (粗面小胞体, 核周囲腔) にもみられた。以上よりリンパ濾胞胚中心では補体および補体レセプターを介した免疫複体の捕捉, 提示が FDC によってなされ, さらに抗体産生を促すものと考えられた。

4. シェーグレン症候群における B 細胞活性化機構と EB ウイルスの関与

(リウマチ痛風センター) 宮坂 信之

シェーグレン症候群 (SjS) における B 細胞活性化現象を解析する目的で, 本症患者末梢血より無刺激で自律性に増殖する細胞株 4 株を得た。これらはいずれも EBNA 陽性であり, B1, B4, HLA-DR などの表面抗原を保有していたことより B 細胞であると思われた。これらの細胞株は無刺激下で IgG あるいは IgM を産生していたが, B 細胞刺激因子 (BSF) の存在下でその増殖, 分化が促進されたことより, BSF に対するアクセプターをも有していることが推測された。さらに本細胞株の培養上清中に IL-1, IL-2, IL-3 様活性など多様なリンフォカイン活性が証明されたことより, in vivo においても活性化 B 細胞が免疫制御機構に影響を及ぼしうることを示唆された。この B 細胞の活性化における EB ウイルスの役割についても考察を加えた。

5. 免疫性神経疾患における髄液 IgG サブクラス (小児科)

平野 幸子・横田 和子・福山 幸夫

中枢神経系内での抗体産生システムを解析する一つの手段として髄液 IgG サブクラスの定量法を開発し, 脱髄疾患で測定を試みた。

方法: モノクローナル抗体を用いた inhibition ELISA で, 4~6 段階に 2 倍希釈した髄液をマウス抗